



被災地へ心の支援を

— 令和6年能登半島地震におけるDPAT活動報告 —

令和6年1月1日に発生した能登半島地震の被災地へ、当院から4班のDPATが派遣されました。

[災害派遣精神医療チーム]
DPATとは…?

自然災害や航空機・列車事故、犯罪事件などの集団災害の後、被災地に入り、精神科医療および精神保健活動の支援を行う専門的なチームです。

第1班 1月3日～8日

発災2日後の1月3日に派遣要請があり同日中に宿泊拠点の富山県高岡市に到着しました。4日早朝から石川県鳳珠郡穴水町で活動を開始し、避難所での診察や他の支援チームとの連携促進を図りました。地震による道路寸断のため活動に伴う移動に困難をきわめました。



活動拠点本部



道路の寸断



第3班 1月25日～30日

石川県庁内のDPAT指揮所で医療、行政、地域の連携支援や避難所の支援を行いました。いしかわ総合スポーツセンター内の1.5次避難所にはテントが設置され、高齢者や障がいのある方など特に配慮が必要な方々の一時的な受入れを行っていましたが、長期的な受入先の選定が課題でした。



避難所のテント



避難所巡回

第2班 1月8日～13日

第1班に続いて穴水町の避難所を中心に活動しました。発災から1週間が経ち避難所ではコロナなどの感染症が広がり現地の支援者も疲れがピークに達していました。現地の支援者も被災者であり支援者向けのチラシを作成して支援者自身の安全を図りました。



支援者向けのチラシ



穴水町の避難所

第4班 2月6日～11日

輪島市役所内に設置されたDPAT指揮所で、指揮所運営、他支援チーム等との連携、避難所からの相談対応等を行いました。発災後1か月経過し、地域の精神科外来が通常診療を再開しましたが、輪島市内は断水が継続しインフラ状況の悪化・住宅の消失等と長期的な生活支援に課題が残る状況でした。



家屋の倒壊



指揮所での活動



当センターの災害派遣活動の歴史

- 平成7年
阪神淡路大震災：精神科救護班派遣（6班、24日間）
- 平成16年
新潟中越地震：こころのケアチーム派遣（2班、10日間）
- 平成23年
東日本大震災：こころのケアチーム派遣（21班、143日間）
- 平成28年
熊本地震：DPAT先遣隊派遣（2班、12日間）
- 令和2年
新型コロナウイルス感染症帰国者支援：DPAT先遣隊派遣（2班、10日間）
- 令和6年
能登半島地震：DPAT先遣隊派遣（4班、24日間）

「支える力を集めて被災地に届ける」



医師 平澤 克己

DPATの活動は発災直後の急性期から始まり、被災地の精神保健福祉機能が回復するまで、時に数ヶ月にわたることがあります。さらに活動場所も、DPAT隊を指揮する本部や、病院などの医療機関、避難所など幅広いです。

第1班は、他県から最も早く被災地に到着したDPAT先遣隊のひとつです。そのため当時DPATが立入を許された最も震源地に近い穴水町に派遣され、関係者と連携して医療支援体制を確立するために尽力しました。

第2班は第1班に引き続き穴水町を支援しDPATの支援体制を確立しました。また、地元の精神科クリニックを支援しながら被災者の精神科救急対応を行うとともに、現地の支援者への支援も図りました。

第3班は震源から遠く離れた金沢市内の1.5次避難所で被災

者の医療支援を行ないました。故郷から遠く離れた生活を余儀なくされた被災者に寄り添い避難生活を支えました。

第4班は被災地に近い輪島市で避難所を巡回し、被災者のために精神科医療の窓口として役割を果たしました。当時、発災から1ヶ月以上が経過していましたが、断水トイレは使えず、入浴もできない過酷な環境で活動しました。

このような目に見える支援活動は、各隊員の周りの多くの方々の見えない支えによって成り立っています。つまり私たちの支援活動は、私たちに関係する全てのみなさまの支える力を集めて、被災地に届けていると言えます。

支えていただいている全ての方々に心から感謝を申し上げます。これからもDPATの活動にご理解とご協力をいただければ幸いです。